

# 大分の伝統文化・浜の市



## 浜の市の歴史

現在、9月の14日から20日の間に行なわれる大分市生石浜の市のお祭りは、本来は「生石浜の御放生会」と呼ばれる柞原八幡宮の秋の祭礼行事です。天正14年(1586)、大友宗麟が大阪から国元の家臣に出した手紙に、「祇園会や放生会を四つ五つ合わせても、この大阪城の普請に集められた人夫の数には及ばない」とあり、このことから当時の大分では祇園宮(上野の弥栄神社)の祭礼とともに、人の集まる盛大なお祭りだったことがうかがえます。江戸時代に入ると、府内藩が市を振興したことで、西日本でも有数の賑やかなお祭りとなりました。江戸時代の大分やかなお祭りとなりました。江戸時代の大分を描いた絵巻物「御城下絵図」には、浜の市の賑わいをみせる様子が描かれており、当時の華やかさを今に伝えます。



## 現在の浜の市



現在の浜の市は14日に柞原八幡宮から仮宮のある生石浜の市への神輿の神幸(お下り)、中日は日供祭と呼ばれる神事、17日に放生会、20日に神社へと還幸(お帰り)が行われます。

神社からの神幸は、3基の神輿に、賀来神社の御神体、小学生による道具の行列、柞原太鼓等がお供につきます。日供祭では、上野の松坂神社の御神体との対面式が行なわれます。陣導面と呼ばれる面を被った禰宜が、松坂社の御神体と対面する儀式です。面を被った陣導の姿は「御城下絵図」の中にも見ることができます。

現在の放生会は、祓川に架かる赤い橋の上で鮒や鯉などの魚を川へ放流し、鳩を放します。

## 浜の市のおみやげ



しきし餅

本来は、祭りの期間だけに作られていたお菓子です。明治の初め頃に作られていた間食用の餅が原形で、大正時代に今の座布団のような形になったと言われています。



一文人形

土で作った顔に彩色を加えて、竹の棒に刺した浜の市のお土産品です。もともと江戸時代に農家の副業として自家の軒先に藁束に刺して、お土産用に一文で販売していました。